日　本　独　文　学　会
2014年　春　季　研　究　発　表　会

研究発表要旨

2014年5月24日（土）・25日（日）

第1日　午前10時00分より

第2日　午前10時00分より

会　場　　麗　澤　大　学

日　本　独　文　学　会
2014年　春　季　研　究　発　表　会

研究発表要旨

2014年5月24日（土）・25日（日）

第1日　午前10時00分より

第2日　午前10時00分より

会　場　　麗　澤　大　学

発 表 者 ・ 発 表 会 場 一 覧

2014年5月24日（土）

5月24日	A会場（1603教室）	B会場（1602教室）	C会場（1501教室）	D会場（1502教室）
10:00～10:05	開会の挨拶 （A会場）			
	総会・シンポジウム	ドイツ語教育部会	口頭発表	口頭発表
10:05～11:30	総　　会			
11:40～12:10	日本独文学会賞授賞式			
12:15～13:15	ドイツ語学文学振興会 授賞式・総会 （12:15－13:15）	ドイツ語教育部会総会 （12:40－13:10）		
13:20～14:20		ドイツ語教育部会主催 講演会 （13:20－14:20）		
	シンポジウム1		口頭発表：文学1	口頭発表：語学1
14:30～15:05	バロックから今日までの ドイツ文化における 図像性と書記性 （14:30～17:30）		大田　浩司	瀧田　恵巳
15:10～15:45			時田　郁子	佐藤　恵
15:50～16:25			杵淵　博樹	白井　宏美
16:30～17:05			杉山　有紀子	
17:10～17:30				
18:00～20:00	懇　親　会　（学生食堂ひいらぎ）			

5月25日（日） 10:00～13:10

5月25日	A会場（1603教室）	B会場	C会場（1501教室）	D会場（1502教室）
	シンポジウム2		口頭発表：文学2	口頭発表：語学2
10:00～10:35	18・19世紀転換期における身体表象とその表現 （10:00～13:00）			
10:40～11:15			前田　佳一	伊藤　克将
11:20～11:55			白鳥　まや	在間　進
12:00～12:35			Andre Reichart	
12:35～13:00				
13:05～13:10	閉会の挨拶 （A会場）			

発 表 者 ・ 発 表 会 場 一 覧

2014年5月24日（土）

5月24日	E会場（1505教室）	F会場 （5階階段　1502教室前）	G会場（1404教室）	H会場（1411教室）
10:00～10:05	開会の挨拶　（A会場）			
	口頭発表	ポスター発表	ブース発表	大学ドイツ語入試展示
		ポスターは11時～掲示		
		13:00～14:30 （発表者待機） 金城ハウプトマン朱美 現代ドイツにおける グリム童話		
13:20～14:20			ブース発表1 （14:00～15:30） Marco Schulze Sprachspiele	大学ドイツ語入試検討 委員会　展示・発表 13:00～17:30
	口頭発表：ドイツ語教育	ポスターは引き続き掲示		
14:30～15:05	石塚　泉美			
15:10～15:45	Tatsuya Ohta			
15:50～16:25	Axel Harting		ブース発表2 （16:00～17:30） 藤原 三枝子　境　一三 平高　史也 大学におけるドイツ語 学習者の動機と動機づけ	
16:30～17:05	Michael Schart			
17:10～17:30				
18:00～20:00	懇　親　会　（学生食堂ひいらぎ）			

5月25日（日）　10:00～13:10

5月25日	E会場（1505教室）	F会場 （5階階段　1502教室前）	G会場（1404教室）	H会場（1411教室）
	口頭発表：文化・社会	ポスター発表	ブース発表	大学ドイツ語入試展示
10:00～10:35	横山　香	ポスターは引き続き掲示		大学ドイツ語入試検討 委員会　展示・発表 （13:00まで）
10:40～11:15	新沼　智之			
11:20～11:55	柴田　隆子		ブース発表3 （11:30～ 13:00） 草本　晶　　濱野　英巳 Holger Schütterle 竹内　拓史 教科書を使わない授業とは？	
12:00～12:35	伊藤　壮			
12:35～13:00				
13:05～13:10	閉会の挨拶　（A会場）			

目次

第 1 日　5 月 24 日（土）

シンポジウム 1（14:30～17:30）

A 会場（1603 教室）

バロックから今日までのドイツ文化における図像性と書記性
―現代の文化学･文学を参照しつつ
Bildlichkeit und Schriftlichkeit in der deutschen Kultur zwischen Barock und Gegenwart. Mit aktuellen Ansätzen aus der Kulturwissenschaft und der Literatur

	司会：縄田 雄二		1
1.	イメージと言語の間の深淵 ―ベンヤミンのアレゴリー論	川島建太郎	2
2.	カフカにおける文字、スケッチ、身体	山尾 涼	3
3.	Bildlichkeit und Wissenserzeugung. Mit einer Betrachtung der Zeichnungen Friedrich Schlegels	高次 裕	4
4.	Film und Buch in Christian Krachts Roman „Imperium“	縄田 雄二	4
5.	Thomas von Steinaeckers „Geister“, eine Weiterentwicklung der *graphic novel*?	Stefan Buchenberger	5

口頭発表：文学 1（14:30～17:05）

C 会場（1501 教室）

	司会：大塚 直、鶴田 涼子		
1.	ヘルダーリンの「河流」のメタファーにあらわれる「力」の概念について	大田 浩司	6
2.	デーブリーンの結合術 ―『山と海と巨人』における人体改造について	時田 郁子	6
3.	語り手はどこにいるか ―ギュンター･グラス初期戯曲作品『洪水』の〈物語〉構造	杵渕 博樹	7
4.	記憶の中のヨーロッパ ―シュテファン・ツヴァイクの 1920 年代の短編における記憶と想起のモチーフについて	杉山 有紀子	8

口頭発表：語学 1（14:30～16:25）

D 会場（1502 教室）

司会：岡本 順治、末松 淑美

1. ダイクシス表現による現前化とフィクションの人称　瀧田 恵巳　10
2. 前置詞 wegen の格支配の変遷 ―言語変化のメカニズムをめぐって　佐藤 恵　10
3. 説明場面で聞き手はどのように「トラブル」を示すのか ―視線を中心にして　白井 宏美　11

口頭発表：ドイツ語教育（14:30～17:05）

E 会場（1505 教室）

司会：Holger Schütterle、濱野英巳

1. 少人数制ドイツ語授業におけるインタラクションの特性と「足場かけ」の可能性　石塚 泉美　13
2. Die Wirkung von Fehlerkorrektur auf Überarbeitungsprozesse und –produkte　Tatsuya Ohta　13
3. L1 oder L2? Ergebnisse einer Umfrage unter Lehrenden und Lernenden zum Sprachgebrauch im japanischen Deutschunterricht　Axel Harting　14
4. „Auf die Lehrenden kommt es an!“ Was wir aus der empirischen Fremdsprachenforschung über die Lehrerrolle wissen　Michael Schart　15

ポスター発表（13:00～14:30）

F 会場（5 階階段 1502 教室前）

（ポスターは期間中を通じて掲出されています）

現代ドイツにおけるグリム童話 ―現代の語り手からの考察　金城ハウプトマン 朱美　17

ブース発表 1（14:00～15:30）

G 会場（1404 教室）

（ブース発表は途中での出入り自由です。）

Sprachlernspiele. Ein Unterrichtsmittel mit hohem pädagogischen Potenzial　Marco Schulze　18

ブース発表 2（16:00～17:30）

G 会場（1404 教室）

（ブース発表は途中での出入り自由です。）

大学におけるドイツ語学習者の動機と動機づけ
―6 言語を対象とした質問紙調査から　藤原 三枝子　境 一三　平高 史也　19

ドイツ語教育部会　「大学ドイツ語入試問題検討委員会」展示・発表（13:00～17:30）

H 会場（1411 教室）

第 2 日　5 月 25 日（日）

シンポジウム 2（10:00～13:00）

A 会場（1603 教室）

18・19 世紀転換期における身体表象とその表現―時間の流れと静止の中の身体
Körpervorstellung und deren Ausdrücke im späten 18. und frühen 19. Jahrhundert

司会：武井 隆道　20
1. ヘルダーの彫塑論における身体表象の諸問題　濱田 真　21
2. ゲーテとタブロー・ヴィヴァンならびにアチチュード　武井 隆道　22
3. 自動人形の時間性　三枝 桂子　22
4. バレエの芸術性 ―舞踊における身体と幻想の連関　照井 夕可里　23

口頭発表：文学 2（10:40～12:35）

C 会場（1501 教室）

司会：松岡 幸司、須藤 勲
1. ペーター・ハントケの語りについて ―Zustand の概念史のために　前田 佳一　25
2. ハンス＝ゲオルク・ガダマーの解釈学における「善意志 guter Wille」の概念 ―ガダマー=デリダ論争を手掛かりに　白鳥 まや　25
3. Das Ringen um Worte. Die Kommunikation als Problem in den Diskussionen in den Jahrbüchern der Deutschen Schillergesellschaft (1989-99)　André Reichart　26

口頭発表：語学 2（10:40～11:55）

D 会場（1502 教室）

司会：田畑 義之、瀬川 真由美
1. fürchten と sich fürchten はどう違うのか ―ドイツ語他動詞構文と再帰構文の違い　伊藤 克将　28
2. ドイツ語研究の構想的視点 ―個別言語研究の実用的応用を求めて　在間 進　28

口頭発表：文化・社会（10:00～12:35）

E 会場（1505 教室）

司会：吉田 耕太郎、平松 智久

1. フィクションのなかのリアリティ　横山 香　30
   ―Charlotte Link の小説における女性像
2. A. W. イフラントが目指した舞台づくり　新沼 智之　30
   ―衣裳や装置の問題を中心に
3. ジャンル確立期の「タンツテアター」をめぐる言説の分析　柴田 隆子　31
   ―ラバン、シュレンマー、ヨースにおける新しい舞台芸術の試み
4. 背景としての旋法音楽　伊藤 壮　32
   ―アドルノ音楽論から透かし見られるある連続体

ポスター発表（10:00～13:00）

F 会場（5 階階段 1502 教室前）

（ポスターは期間中を通じて掲出されています）

ブース発表 3（11:30～13:00）

G 会場（1404 教室）

（ブース発表は途中での出入り自由です。）

教科書を使わない授業とは？　草本 晶　34
―麗澤大学ドイツ語･ドイツ文化専攻における新カリキュラム導入の試み　濱野 英巳　Holger Schütterle　竹内 拓史

ドイツ語教育部会　「大学ドイツ語入試問題検討委員会」展示・発表（10:00～13:00）

H 会場（1411 教室）

第 1 日　5 月 24 日（土）

シンポジウム 1（14:30~17:30）　　A 会場（1603 教室）

バロックから今日までのドイツ文化における図像性と書記性
―現代の文化学・文学を参照しつつ

Bildlichkeit und Schriftlichkeit in der deutschen Kultur zwischen Barock und Gegenwart. Mit aktuellen Ansätzen aus der Kulturwissenschaft und der Literatur

全体説明

縄田雄二　**Yûji Nawata**

Kulturwissenschaft, die in den letzten Jahrzehnten die Geisteswissenschaften in deutschsprachigen Gebieten erneuerte, integrierte Bildwissenschaft und philologische Disziplinen wie Literaturwissenschaft in sich. So ist die Beziehung von Bild und Schrift eines der beliebtesten und fruchtbarsten Themen der Kulturwissenschaft geworden. Die Rolle der Bilder, in den traditionellen, meistens philologisch fundierten Geisteswissenschaften oft unterschätzt, wurde ebenfalls neu entdeckt. Oft funktionierte dabei die Medienwissenschaft, die den Kern der kulturwissenschaftlichen Theorien bildet, als Basis, auf der die Zusammenhänge von Schrift und Bild diskutiert oder der Stellenwert der Bilder in der Kultur eingeschätzt werden können.

Als weitere Entwicklung dieser Tendenz gibt es heute verschiedene Forschungsströmungen. Das Exzellenzcluster der Humboldt-Universität zu Berlin "Bild Wissen Gestaltung" betont die Rolle der Bilder und der Gestaltungen nicht nur in der Kultur, sondern auch in den Naturwissenschaften. Parallel zu den Entwicklungen in der Kulturwissenschaft lässt sich in der zeitgenössischen deutschsprachigen Literatur eine Aufwertung der Rolle der Bilder beobachten: Graphic novels sind endlich auch in Deutschland Mode. Auch gibt es Schriftsteller, die sich mit Medien- und Bildwissenschaft beschäftigen und interessante Bildlichkeiten in ihre literarischen Werke einbauen. Es ist nun Zeit, über diese neuen Verschränkungen von Bild und Schrift in Denken und Literatur zu diskutieren.

Dies ist das Ziel des geplanten Symposiums.

Betont wird dabei die historische Perspektive. Der Beitrag von Kawashima analysiert Benjamins Thesen über barocke Embleme sowie Allegorien und bezieht seine Analyse auf heutige Bildtheorien. Yamao setzt sich mit der Rolle der Zeichnungen in Kafkas Schaffen auseinander, unter Anwendung heutiger Theorien. Takatsugi wendet aktuelle Ansätze der Bildwissenschaften auf Friedrich Schlegel an. Nawata befasst sich mit einem Gegenwartsroman, der am Anfang des 20. Jahrhundert spielt. Buchenberger schließlich interpretiert ebenfalls einen Gegenwartsroman mit Comicelementen vor dem Hintergrund der Entwicklung der graphic novel. Die historischen Stadien von der Barock über Romantik und das frühe 20. Jahrhundert bis hin zur Gegenwart werden somit aus den Perspektiven des heutigen kulturwissenschaftlichen Denkens und der Gegenwartsliteratur erhellt.

Nach allen Vorträgen wird die Diskussion mit den Zuhörern auf Japanisch und auf Deutsch geführt.

1. イメージと言語の間の深淵―ベンヤミンのアレゴリー論

川島建太郎

ベンヤミンの『ドイツ悲劇の根源』は単なる文献学的バロック文学研究ではなく、哲学、神学、歴史、政治思想、言語論等とかかわる壮大な文化学研究であり、近代の「根源」としての 17 世紀を総合的にとらえようとする試みである。本発表では、この文化学的バロック悲劇論の中心にあると目されるメディア論的側面、すなわちイメージと言語の関係をめぐる理論に焦点をあてる。ベンヤミンはギーロウ、パノフスキー／ザクスル、ヴァールブルクらのルネサンス絵画をめぐるイコノロジー研究から決定的な影響を受けながら、アレゴリーという、イメージと概念との結合からなる表現形式を、バロック悲劇のシェーマとして把握する。重要なのはアレゴリーが、イメージと意味の調和的結合ではなく、両者の乖離、いいかえれば「図像的存在と意味の間の深淵」を前提すると解釈されていることである。ベンヤミンによればイメージと概念、知覚と精神的なもの、具象と

抽象との間にある深淵こそ、アレゴリーが作動する余地（Spielraum）である。従来このようなアレゴリー論は、脱構築派のエクリチュール理論と関連づけられてきた。それを踏まえた上で本発表は、レッシングのラオコーン論やフーコーの「これはパイプではない」等を参照しつつ、イメージと言語という異種メディア間の関係をめぐる理論として位置づけようと試みる。

2. カフカにおける文字、スケッチ、身体

山尾　涼

フランツ・カフカは、スケッチ（Zeichnung）をも能くした。日記などに彼が書き込んだスケッチは近年一書にまとめられた（Niels Bokhove / Marijke van Dorst (Hg.): „Einmal als großer Zeichner.“ Franz Kafka als bildender Künstler. Prag: Vitalis 2006, オランダ語原書 2003 年）。これを、今日のメディア論を視座に含め、カフカのテクストと連関させつつ分析することが本発表の目的である。

カフカは、例えばツィシュラーの研究が示すように、写真や映画によって、文字を超える生々しさで世界のありさまが再現される様子に接していた。カフカの日記には、視覚によって知覚される外界のダイナミズムを文字で表現しようとする努力が表れている。それと同時に、文字メディアの限界についての自覚が、スケッチというメディアを援用している点に認められる。

カフカと視覚的メディアに関する先行研究は、先に挙げたツィシュラーやヤールアウスの研究のように写真や映画との関係に光をあてたものが主であり、スケッチの分析に関しては補う余地がある。近年発表されたノイマンによるカフカのメディア論的分析をふまえつつ、本発表では身体という要素に関連づけて論じる。

テクストという書記メディアから読み取られるカフカの身体観及び人間観は、スケッチで素描される図像と結びつけて論じることが可能である。この作業により、新しいカフカ解釈を示したい。

3. Bildlichkeit und Wissenserzeugung. Mit einer Betrachtung der Zeichnungen Friedrich Schlegels

高次　裕　Yutaka Takatsugi

Seit 2013 arbeitet das Exzellenzcluster der Humboldt-Universität Berlin „Bild Wissen Gestaltung“, das Wolfgang Schäffner, Professor für Wissens- und Kulturgeschichte an der HU, zusammen mit Horst Bredekamp leitet. Es gab zwei „Wenden“, die dem Konzept dieses Clusters zugrunde liegen. Zuerst kam der „linguistic turn“, der in Gedanken sprachlich konstituierte Ebenen erkannte. Es folgte dann der „iconic turn“, der betonte, Ideen seien auch durch Bilder mitgestaltet. Auf dieser Basis postuliert nun Wolfgang Schäffner einen „design turn“, d. h. eine neue Verbindung von Wissen und Gestaltung. Schäffners Radikalität besteht darin, dass er nicht nur die Fusion der Natur- und Ingenieurwissenschaften im Bereich des Designs im Sinne der Gestaltung, sondern auch die Mitwirkung der Geisteswissenschaften an dieser Zusammenfügung vorschlägt.

In der ersten Hälfte des Vortrags geht es darum, die oben beschriebenen wissenschaftshistorischen Entwicklungen zu skizzieren und insbesondere die Bewegungen um den iconic turn und den design turn vorzustellen sowie zu diskutieren. In der zweiten Hälfte versucht der Vortrag, einen Kerngedanken dieser Bewegungen exemplarisch auf die Romantik anzuwenden. Es handelt sich darum, wie Friedrich Schlegel seine Begriffe mit Hilfe seiner eigenen Zeichnungen entwickelte. Es soll gezeigt werden, dass seine Bilder performativ und aktiv an der Konstruktion seiner Ideen teilnahmen.

4. Film und Buch in Christian Krachts Roman "Imperium"

縄田雄二　Yûji Nawata

Sowie Christian Kracht seinen im frühen 20. Jahrhundert in der Kolonie Deutsch-Neuguinea spielenden Roman "Imperium" veröffentlicht hatte, sorgte dieser für große Aufregung in der Öffentlichkeit. Bei dieser Debatte handelte es sich vor allem um die Beziehung der Wirklichkeitsebene des Autors Kracht und der Diskursebene des Romans. Dabei wurde vor allem in Betracht bezogen, dass sich der ganze Roman zum Abschluss des Werks als eine Art Filmdrehbuch entpuppt: die Fiktionalität des Diskurses wird in der Fiktion selbst thematisiert.

Um die Reichweite des Romans richtig ermessen zu können, sollte man sich allerdings nicht damit begnügen, auf die Unterscheidung Diskurs/ Wirklichkeit hinzuweisen. Man sollte vielmehr die Überlegung erstens zu einer Diskursanalyse im Sinne von *postcolonial studies* und dann, noch wichtiger, zu einer Medienanalyse vertiefen. Der Vortrag will die folgenden Fragen aufgreifen: Was bedeutet es, diskurs- und medienanalytisch gesehen, dass der Roman ein Filmdrehbuch ist? Wie verhalten sich in diesem Werk Film und Buch? Wie sahen die Medienkonstellationen in der wirklichen Kolonie Deutsch-Neuguinea am Anfang des 20. Jahrhundert aus? Wie werden diese in diesem im frühen 21. Jahrhundert erschienenen Roman inszeniert? Es soll gezeigt werden, dass Krachts Roman auf den historischen Stellenwert des Films eingeht und damit als ein Stück Mediengeschichte zu lesen ist.

5. Thomas von Steinaeckers "Geister", eine Weiterentwicklung der *graphic novel* ?

Stefan Buchenberger

Comics als literarisches Medium waren lange unterschätzt. Der entscheidende Schritt aus dem Ghetto der vermeintlich trivialen Bildgeschichten für Kinder und Jugendliche, war die sogenannte graphic novel, ein ambitioniertes, umfangreicheres Comic, das allein schon durch die Bezeichnung "novel" auf seine literaischen Ansprüche hinweist. Die ersten Exemplare dieser neuen Gattung erscheinen 1976, aber der Begriff selbst wurde 1978 mit Will Eisners "A Contract with God" geprägt. Auch in Deutschland gibt es in letzter Zeit viele ambitionierte Projekte die sich als graphic novel bezeichnen.

Mittlerweile verwenden auch moderne Autoren ganz bewusst Bilder als Teil ihrer Texte und nicht mehr zur blossen Illustration des Geschriebenen. Ein Beispiel hierfür ist Thomas von Steinaeckers "Geister" (2008), in dem Comics von Daniela Kohl sowohl der Illustration dienen, aber auch anstelle des geschriebenen Textes Teil der Handlung sind. Ebenfalls von großer Bedeutung für diesen Roman ist das Internet, das sowohl im Roman thematisiert wird, als auch von Steinaecker selber als wichtiger Grund für die Einbeziehung von Bildern in die Literatur genannt wird, da, ihm zufolge, durch die Verbreitung von freien Verbindungen zwischen Bild und Text im Internet, solche Mischformen nunmehr auch in der Literatur akzeptiert werden. Die Interpretation von "Geister" vor diesem Hintergrund ist Ziel dieses Vortrags.

口頭発表：文学 1（14：30〜17：05）　　C 会場（1501 教室）

1. ヘルダーリンの「河流」のメタファーにあらわれる「力」の概念について

大田浩司

ヘルダーリンは『断片ヒュペーリオン』(1794) において、人間の「自己形成」(Bildung) の道程は、「引力」と「斥力」という二つの力の相互作用によって生み出された楕円形の「離心的軌道」(Exzentrische Bahn) を辿ると想定した。ケプラーの天文学・力学とフィヒテの自我哲学との融合によって生まれた「離心的軌道」の図式は、ヘルダーリンの詩作品において頻繁に登場する「河流」(Strom) というメタファーにもまた潜んでいる。「河流」は、自身で自身を制御しつつ、停滞した古い生活様式を打ち破って道を切り開き、新たな理想へ個人あるいは人間社会を方向付けるが、そこには「引力」と「斥力」という対立する二つの力の相互作用が働いている。本発表は、ヘルダーリンの「河流」をテーマとする詩作品（『ガニュメート』、『ライン』、『イスター』）および哲学的論考（ピンダロス断片『活力を与えるもの』への注釈）を分析対象とし、そこにあらわれる「力」の概念について考察する。ヘルダーリンの「河流」をテーマとした詩作品について論じた重要な先行研究として、Böschenstein（1959）、Heidegger（1984）、Behre（1994）が挙げられるが、これらの研究は「河流」のメタファーを哲学的・文学的にしか扱っていない。Honold（2005）はヘルダーリンの「離心的軌道」の概念を当時の天文学との関係から詳細に分析し、ヘルダーリンのテキストの文化学的読解に先鞭をつけたが、本発表は天文学のみならず、地質学・地球発生学・生物学といった自然科学の諸領域、さらにはフィヒテ・ヘルダー・シラーらの哲学を横断しつつ、18 世紀ドイツにおける「力」をめぐる諸言説との関係からヘルダーリンの「河流」という詩的形象を解明することを目的とする。

2. デーブリーンの結合術―『山と海と巨人』における人体改造について

時田郁子

アルフレート・デーブリーンの長編小説『山と海と巨人』(1924 年) は、科学技術の発達した未来における人間と自然の関係を主題にする大作であり、彼が

1921 年に執筆を始めてから 1932 年に縮小版を『巨人』という題名で発表するまで長らくこの主題に関心を寄せたことから、彼の自然哲学を解明する鍵と考えられる。本発表では、科学技術の最新の成果にして魔法のように見えるもの、人工食物、人間の植物への変身、皮膚化する肌着、人間柱を取り上げ、これら人体改造に関わるモティーフを「水と嵐の教義」に関連づけて、考察する。「水と嵐の教義」とは、個人を均一化して集団の存続を目指す教えであり、その一環として人工食物が開発される。安定した供給を約束する人工食物は普及し、人間の身体は虚弱化する。人間は食物の摂取を通して外部世界に結びつくため、自然に由来しない食物を取るうちに、自然との関係を絶つことになる。ここには、万物は要素の組み合わせから成るとする要素還元主義の影響が見られるが、デーブリーンの特徴は要素の組み替えを引き起こす力を想定する点にある。本発表では、要素の組み替えを結合術と呼び、人間を植物に変身させる粉、肌着を皮膚化するきっかけとなる皮膚と布の接触、人間柱において人間と動植物を合体させるトルマリンに見られる結合術の働きを分析し、結合術による人体改造の意味を問い、デーブリーンの人間観を明らかにする。

3. 語り手はどこにいるか
―ギュンター・グラス初期戯曲作品『洪水』の〈物語〉構造

杵渕博樹

1957 年成立とされる戯曲『洪水』Hochwasser は、出世作『ブリキの太鼓』(1959) の直前に執筆された作品である。また、この戯曲の基本構図は、家族の歴史を枠組として、破局を経てなお無反省な戦後社会を風刺しようとするものである。その意味で本作は、『ブリキの太鼓』およびこれを含むダンツィヒ三部作の陰画として読むことができる。

『洪水』には狂言回し、すなわち〈語り手〉的役柄は存在しない。しかし、のちにグラスが一人称の語りによる小説の大家となることを念頭に置いて、あえてこの戯曲の作品世界に語り手の視点を探すと、突然の帰郷を果たす息子レオの位置が浮かび上がる。彼は〈語り手〉として語ることはない。しかし、彼の言動は、彼が帰還し、しばらく身を置き、また去っていく〈家〉に対する外側から

の視点、アウトサイダーの視点によってもたらされるものであり、作品世界全体を対象化する契機を孕んでいる。

「洪水」のあと、秩序の回復を求め、復興に向かう家族の姿は、作家の個人史を反映しつつ西ドイツの戦後を象徴し、彼の批判してやまなかった小市民社会のひとつの現場としての小市民家庭の典型となる。ただし、そこに打ち込まれた楔たる息子レオは、ここでは〈家族を物語る言葉〉を持たない。そこでは違和感としてほのめかされるにとどまっていた感傷と愛着と未練と侮蔑とを〈物語る言葉〉の奔流として吐き出すのが、『ブリキの太鼓』において自らの〈家族の記憶〉の中に乱入する〈息子〉オスカルなのだ。

4. 記憶の中のヨーロッパ
―シュテファン・ツヴァイクの 1920 年代の短編における記憶と想起のモチーフについて

杉山有紀子

シュテファン・ツヴァイクの戦間期の短編小説『見えないコレクション』*Die unsichtbare Sammlung*（1925）と『本の人メンデル』*Buchmendel*（1929）を扱う。前者は所蔵する大量の美術作品を隅々まで記憶する盲目の収集家、後者はあらゆる書誌情報を記憶する古書商と、いずれも並外れた記憶力を持つモノマニア的人物が主人公で、彼らの記憶の中の芸術は第一次世界大戦によって崩壊した汎ヨーロッパ的文化世界を象徴する。だが作中ではこの特異な人物像と同等に、一人称の語り手が彼らとの関わりを通し、自らが大戦によって失ったものの記憶を現在へと再統合し、戦後社会に生きる者としての「罪」を問い直していく過程にも重きが置かれている。本論ではこの語り手の体験に焦点を当て、A.アスマンの記憶論（特に『想起の空間』*Erinnerungsräume*（1999）における記憶のメタファー論、場所の記憶、及び戦争トラウマの処理に関する議論）に依拠しつつ、語り手たちによる記憶との取り組みを大戦後の精神的喪失からの救済のプロセスとして読み解き、ツヴァイクの戦中戦後における「ヨーロッパ」理念の特質を明らかにする。さらにこれらの作品にみられる、共有の場を通した想起体験の普遍化の試みを分析することを通して、彼の短編作品が同時代に対してどのよう

な意図をもって送り出され、また同時代の側から見ていかなる意味を持ち得たのか、同時期における彼の文学活動全般（その保守的あるいは大衆的とされる側面も含め）の方向性及びその今日的意義についても視野に入れつつ考察する。

口頭発表：語学 1（14:30〜16:25）　　D 会場（1502 教室）

1. ダイクシス表現による現前化とフィクションの人称

瀧田恵巳

her-と hin-（herauf-hinauf のように、her と hin が対立し共通の空間的方向を示す合成語）は、物語場面において知覚される情景や場面そのものを伴う作中人物の移動など、過去形にも関わらず、その場面で正に展開される出来事の描写に用いられる。これは、フィクションで過去形が時間的意味を失う現象、即ち Hamburger（1977）: Die Logik der Dichtung の指摘する「現前化」に該当する。

本発表では次の二つの課題を検討する。まず her-と hin-が現前化に関わる要因を、ダイクシス性と方向性という二つの観点から明らかにする。ダイクシスに関する先行研究としては瀧田（2009、2010）、方向に関しては関口（1961）『冠詞』第二巻の「単回遂行相動作」と Hamburger（1977）の「情況動詞」が挙げられる。さらに現前化と作中人物の人称との関係について論じる。Hamburger（1977）は、現前化を論拠として、三人称物語を純粋なフィクションとする一方、一人称物語は語り手の経験（過去）を報告する自伝的形式であるが故に非典型的とする。だが her-と hin-による現前化は三人称物語にも一人称物語にも現れる。この現前化と人称の関係は、一見矛盾すると思われるが、瀧田（2014）のダイクシスから見た物語構造により説明することができる。結論を先取りすれば、現前化は、描写対象（しばしば「指示場の中心：Origo」）の客体化、端的に言えば描写対象と語り手の隔たりによって可能になるが故に、より三人称に適合する。

本発表は、上記の内容を提示すると同時に、her-と hin-のダイクシス性、並びに Origo と視点の区別を主張する。

2. 前置詞 wegen の格支配の変遷
―言語変化のメカニズムをめぐって

佐藤　恵

Keller（1990）によれば、言語変化は人が起こそうとして起こすものではなく、

動機づけのある言語使用が積み重なった結果として生じるものである。それをKellerは「見えざる手のプロセス」というメタファーで言い表している。本発表は、この言語変化の「見えざる手」というブラックボックスに、書き手の言語意識という観点から迫ろうとするものである。

1520年から1870年に出版された散文テクスト（書籍184冊）をデータとして前置詞wegenの格支配の変遷（総用例数約4,600個）を分析したところ、言語意識という観点からふたつの興味深い言語変化の事例を観察することができた。そのひとつは、「文法化」に関わる。wegenは本来、〈von＋2格+ wegen〉という前置詞句（「～の側から」）のなかの名詞であった。しかし、この前置詞句から前置詞 von が脱落することによって、wegen が前置詞として意識されるようになった（16世紀後半）。このように前置詞として文法化したことが、wegenに2格以外の格と結びつく可能性を開いた。もうひとつは、文法家に関わる。16 世紀後半に使用され始めた〈wegen+3格〉は18世紀の経過のなかでいったん大きく増加し〈wegen＋2格〉と拮抗するまでに至るが、1800年頃を境に突如として減少する。この〈wegen+3格〉の激減の原因は、「wegenは2格と結ぶのが正しく、3格は誤りである」とする文法家アーデルングの規範的発言（1781年）が学校教育で教えられることにより、書き手に wegen の格支配に関する正誤の意識が生まれたことにあるという解釈が可能である。

3. 説明場面で聞き手はどのように「トラブル」を示すのか
―視線を中心にして

白井宏美

会話における理解・不理解に関する研究は、Deppermann（2008）やDeppermann/Schmitt（2009）などで行われてきたが、視線や表情などの伝達モダリティを踏まえた比較研究はまだ少ない。また、昨今ますます専門家と素人のコミュニケーションの重要性が高まっている。

そこで、本発表では、専門家（話し手）から素人（聞き手）が専門的内容について説明を受ける場合、理解に関わるトラブルが起こった際、どのようにトラブルが示されるのか、その示し方に日独で差があるのかについて分析を行う。デー

タとして、大学院生が専門分野の異なる相手に自分の研究テーマを説明する場面を設定し、日独の両国において同一条件下でビデオ収録した音声・映像を使用する。

分析の成果として以下の点をあげることができる。聞き手が説明を受けていて理解に関わるトラブルが起こった際、日独ともに視線が相手からそらされる点が共通しているが、その際ドイツ語データでは頷くことや、微笑むことなどが中断されるか、もしくは時系列に示されるのに対して、日本語データでは、頷きや微笑みなどが視線はずしと共起する傾向がある点が異なっている。また、話し手は聞き手の非言語行動をモニターしており、トラブルに関して聞き手が明示的な言語行動を起こす前に、自らの説明を修復している。

口頭発表：ドイツ語教育（14:30～17:05）　　E 会場（1505 教室）

1. 少人数制ドイツ語授業におけるインタラクションの特性と「足場かけ」の可能性

石塚泉美

本発表では、ドイツ語授業で起きている「教えと学びのプロセス」について「インタラクション」および「内省」を手がかりに考察した、縦断的研究（発表者の博士論文）の結果の一部を紹介する。

早稲田大学グローバルエデュケーションセンター設置科目「ドイツ語コミュニケーション」を調査フィールドとして、2 学期間、計 3 グループの少人数制ドイツ語授業において、1）授業の映像・音声データ、2）授業参加者へのフォローアップ・インタビュー、3）受講生アンケートという、3 種類の質的データを収集・分析した。「ドイツ語コミュニケーション」のように、目的言語で実施される外国語授業において、外国語はコミュニケーションの目的であると同時に、コミュニケーションの手段でもある。そのため、そこで起こるインタラクションは教室以外の社会的フィールドではあまり見られない特性を持つ。

本発表では、Leo van Lier（1996）の Types of pedagogical interaction の分析枠組みを用いて、そこで起こるインタラクションの特性を考察したい。その際、各参加者が平等に自由に会話をする段階（Transformation）が授業という制度的枠組みの中でそもそも達成可能なのか、グループ間でどういった相違点が認められるのかという点に着目する。また、外から観察可能な面だけでなく、クラスルーム・リサーチでしばしば見落とされがちな、フィールド参加者の多様なまなざしにも目を向けたい。その結果をふまえて、どのようなインタラクションが足場かけとして授業中の学びを助けるのか、あるいは学びの機会を阻害するのか、そして学習者の積極的な授業参加を促すためにはどうするべきかという、授業実践への提言を試みたい。

2. Die Wirkung von Fehlerkorrektur auf Überarbeitungsprozesse und -produkte

Tatsuya Ohta

Zur Wirkung von schriftlichem Lehrerfeedback zu Lernertexten wurden bisher meh-

rere quantitative Untersuchungen unternommen, aber nur vereinzelt qualitative Untersuchungen. Im Vortrag wird der Frage nach der Wirkung von direkter und indirekter Fehlerkorrektur nachgegangen und das Ergebnis einer vom Referenten durchgeführten qualitativen Untersuchung vorgestellt.

Untersuchungsteilnehmer waren 12 Deutschlernende auf Grundstufen- (GER A1.2) und Mittelstufen-Niveau (B1). Ihnen wurde eine Schreibaufgabe gestellt, die sie allein und ohne Hilfsmittel erledigen sollten. Die Lernertexte wurden dann mit Lehrerfeedback zurückgegeben, wobei bei Gruppe A alle formalen Fehler berichtigt, bei Gruppe B unterstrichen und mit Fehlercodes versehen („G“ für grammatische Fehler etc.) und bei Gruppe C nur unterstrichen wurden. Im Anschluss sollten die Teilnehmer ihren Text anhand des Lehrerfeedbacks noch einmal bearbeiten.

Anhand von Laut-Denk-Protokollen der Bearbeitungsprozesse sowie der transkribierten Daten retrospektiver Interviews wurden die 12 Einzelfälle explorativ analysiert und daraus *Typen* des Lernerverhaltens gebildet, um das Verhältnis zwischen Feedbacktyp und Haltungstyp zu erforschen. Als Ergebnis stellte sich u. a. heraus, dass beim schriftlichen Feedback zu Lernertexten die direkte Korrektur (Berichtigung von Fehlern) im Vergleich zur indirekten Korrektur durch Fehlercode oder Unterstreichung weniger Reflexionen bei den Lernenden anregt und die indirekte Korrektur durch bloße Unterstreichung die Spontaneität der Lernenden bei der Bearbeitung fördern kann.

3. L1 oder L2? Ergebnisse einer Umfrage unter Lehrenden und Lernenden zum Sprachgebrauch im japanischen Deutschunterricht

Axel Harting

Der Beitrag widmet sich den Ergebnissen einer im Sommersemester 2013 durchgeführten Befragung zur Verwendung von Deutsch und Japanisch als Lehrsprachen im japanischen Deutschunterricht, an der sich insgesamt 60 Lehrende und fast 2500 Studierende aus 50 Universitäten in ganz Japan beteiligten. Bei der Untersuchung wurde von der These ausgegangen, dass die Wahl der Lehrsprache lehrer- und lernerbedingten Faktoren sowie kontextuellen Gegebenheiten des jeweiligen Lehrkontextes unterliegt. Zur Verfolgung dieser These sollten durch eine überwiegend quantitativ ausgerichtete schriftliche Umfrage einzelne Faktoren und deren Gewichtung im Rahmen der Sprach-

wahl detaillierter erörtert werden. In den für die Lehrenden konzipierten Fragebögen sollten diese, den Lehrkontext der von ihnen befragten Klassen charakterisieren und angeben, für welche Zwecke (Ankündigungen, Erklärungen, Anleitungen, etc.) sie in diesen Klassen eher zur L1 oder zur L2 der Lernenden als Unterrichtsmedium greifen würden. Die Lernenden sollten auf ihren Fragebögen eine Einschätzung zur Sprachverwendung ihrer Lehrenden abgeben und Wünsche für eine potenzielle Optimierung äußern. Als Variable bei der Datenauswertung wurden unter anderem die Muttersprache der Lehrenden (Deutsch bzw. Japanisch) sowie das Sprachniveau der Studierenden (A0 bis B2) herangezogen. Im Rahmen der Präsentation sollen die durch die Untersuchung gewonnenen Einblicke und Erkenntnisse an die Fachgemeinde zurückgegeben und zur Diskussion gestellt werden.

4. „Auf die Lehrenden kommt es an!“ Was wir aus der empirischen Fremdsprachenforschung über die Lehrerrolle wissen

Michael Schart

Dass Lehrerinnen und Lehrer mit ihrer Haltung, ihren Entscheidungen oder ihren Handlungen im Klassenraum einen entscheidenden Einfluss auf die Lernerfolge ausüben, kann mit mit einer Fülle von empirischen Forschungsergebnissen aus den zurückliegenden Jahrzehnten belegt werden. In seiner Meta-Studie „Visible Learning“ hat der neuseeländische Bildungsforscher John Hattie (2008) diese Erkenntnisse gebündelt und damit dem Lehrberuf weltweit wachsende Aufmerksamkeit verliehen.

Der Vortrag knüpft an diese Meta-Studie an, legt jedoch den Schwerpunkt auf die Forschungen zum Fremdsprachenunterricht, die bei Hattie kaum Beachtung finden. Ausgehend von den Schwachpunkten der großen Methodenvergleiche der 1970er Jahre werden derzeit dominierende Forschungsansätze und deren wichtige Ergebnisse vorgestellt. Die Relevanz dieser Ergebnisse für den Kontext des Deutschunterrichts in Japan, für den kaum empirische Forschungen zur Lehrerrolle vorliegen, soll zur Diskussion gestellt werden.

Der Vortrag vertritt die These, dass ein professionelles Handlungsrepertoire einerseits und eine professionelle Einstellung zur eigenen Tätigkeit andererseits wichtige Voraussetzungen darstellen, um die Qualität unterrichtlicher Prozesse weiterzuentwickeln.

Da damit unmittelbar die Frage nach einer adäquaten beruflichen Ausbildung verbunden ist, geht der Beitrag auch auf einige mögliche Konsequenzen für die Lehreraus- und fortbildung ein.

ポスター発表（13:00〜14:30）　　F 会場（5 階階段 1502 教室前）

現代ドイツにおけるグリム童話
―現代の語り手からの考察

金城ハウプトマン　朱美

現代ドイツでメルヒェンの語り手と呼ばれる人たちの大多数は、語り手として専門教育を受けた人たちであり、グリム兄弟にメルヒェンを提供した語り手たちのように、子どもの頃に聞いたメルヒェンを語っているのではない。現代の語り手はメルヒェンフェスティバルやクリスマスマーケット等の催しや、幼稚園や小学校といった教育の場で、それぞれの場と聴衆に応じてメルヒェンをアレンジして語るので、グリム童話は原文通りに語られない傾向がある。語り手たちは聴き手に幸福感を与えるようにメルヒェンを語るだけではなく、ドイツ語教育に参加したり、早い時期に子どもたちに文化の多様性を認識させ、多文化共生社会の実現を目指した教育に参与したりしている。

本ポスター発表では、19 世紀から今日までのメルヒェンの語り手についてまとめ、グリム童話の原文と参与観察から得られた現代の語り手が語るグリム童話を比較して明らかになる共通点と相異点から、現代ドイツが抱える問題点ならびに人びとが希求する事柄を抽出し、現代の語り手と彼らの語りの社会的意義を文化科学的、社会学的およびジェンダーの視点から複合的に考察することを目的とする。現代の語り手のプロフィールや語りのレパートリー等をアンケート調査したカトリン・ペーゲ＝アルダーの先行研究（『語り手事典』2000 年）を参照する。尚、本研究は現在進行中の研究課題である。

ブース発表 1（14:00～15:30）　　G 会場（1404 教室）

Sprachlernspiele. Ein Unterrichtsmittel mit hohem pädagogischen Potenzial

Marco Schulze

Während der Kabinenpräsentation möchte ich meine Forschungskonzeption zum Thema: „Untersuchung zum pädagogischen Wert von Sprachlernspielen“, vorstellen und diskutieren.

These:

Sprachlernspiele besitzen eine große Anzahl von pädagogischen Vorzügen, welche bereits in unterschiedlichsten Fachpublikationen erörtert wurden. Jedoch scheinen bestimmte Faktoren, den Einsatz von Sprachlernspielen im Deutschunterricht an japanischen Universitäten zu behindern.

Fragestellung:

Welche nachteiligen Faktoren sind es und wie können diese behoben werden?

Forschungsgegenstand:

Untersuchung der bisherigen Erfahrungen zu den bereits existierenden Sprachlernspielen, sowie die Evaluation von Sprachlernspielen, die von mir nach den aktuellen Empfehlungen der deutschen DaF-Forschung entwickelt wurden.

Forschungsziel:

Entwicklung eines Spielekatalogs, deren Spiele effektiv und variabel in den Sprachunterricht an den Universitäten eingesetzt werden können.

Form der Präsentation:

Beginnen werde ich mit einer dreißigminütigen Power-Point Präsentation. Hier werde ich, sowohl auf meine Erfahrungen im Unterricht an der Yamagata Universität, sowie auf die theoretischen Grundlagen und Definitionen eingehen. Es folgt die Vorstellung der einzelnen Fragebögen sowie der mitgebrachten Sprachlernspiele. Anschließend gibt es die Möglichkeit, die Spiele auszuprobieren. Am Ende bitte ich um die Evaluation per Fragebogen sowie um einen regen Meinungsaustausch zum vorgestellten Thema und den mitgebrachten Spielen. Hierbei freue ich mich über jede konstruktive Kritik, die es mir erlaubt, mein Projekt zu einem erfolgreichen Abschluss zu führen.

ブース発表 2（16:00～17:30）　　G 会場（1404 教室）

大学におけるドイツ語学習者の動機と動機づけ
―6 言語を対象とした質問紙調査から

藤原三枝子
境　一三
平高史也

本発表では、科研事業「新しい言語教育観に基づいた複数の外国語教育で使用できる共通言語教育枠の総合研究」（研究代表：西山教行、基盤研究（A））の一環として、2012 年度に実施した質問紙調査の結果を報告する。調査は 2 回実施され、第 1 回目は 2012 年 5 月～6 月に、第 2 回目は 2012 年 12 月～2013 年 1 月に、同じ質問紙を用いて、同じ学生と教員を対象として行われた。第 1 回目調査には、6 言語全体で 17,000 人を超える学生が協力し、422 人の先生方にご協力をいただいた。ドイツ語に関しては、75 人の先生方にご協力をいただき、合計 2,711 人の学生が調査に参加した。本発表は、その第 1 回調査の分析結果であるが、とくに、①動機づけの理論である「自己決定理論」と「期待価値理論」に基づく質問紙の量的分析によって、ドイツ語学習者の動機づけの傾向、ドイツ語学習者とそれ以外の 5 言語（フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語、韓国・朝鮮語）との比較によるドイツ語学習者の相対的な動機づけのあり様を探ること、②自由記述から窺えるドイツ語学習動機（理由）、および　③教師による学習者の授業参加への働きかけと、学習環境に対する学習者の意識の関連などの分析結果を示すことを目的とする。

本調査から、日本の大学においてドイツ語を学ぶ学生たちの動機づけに関する傾向を理解するとともに、どのような学習環境が、学生を学びへと動機づける可能性があるのかを探りたい。

第 2 日　5 月 25 日（日）

シンポジウム 2（10:00～13:00）　　A 会場（1603 教室）

18・19 世紀転換期における身体表象とその表現―時間の流れと静止の中の身体
Körpervorstellung und deren Ausdrücke im späten 18. und frühen 19. Jahrhundert

18 世紀中葉にヴィンケルマンが古代ギリシャ美術をめぐる諸論考を著して以来、ヨーロッパにおける身体表象の軸は、時間の流れの中に生起する身体を動きの中で表象するバロック的絵画表現から、時間の流れを断ち切って静止の瞬間において把握する古典主義的彫塑表現へと移行していく。19 世紀のロマン主義において、身体は個人の一回的で具体的な生の容器として捉えられるようになり、再び時間の流れの中に位置づけられるようになる。

本シンポジウムはこのような認識を基盤とし、身体表現において時間の流れと静止という契機がどのように扱われ、どのような表現の可能性につながっていったかを、ヘルダーの彫塑論とゲーテの演劇観、さらに人形と舞踊において分析する。

発表は研究対象の時代順に、濱田、武井、三枝、照井の順に行う。濱田はヘルダーの彫塑論と感覚論を中心に、従来触覚優位と捉えられてきたヘルダーの身体思想の根底には、身体と時間の関係性が重要なファクターとして存在し、視覚と触覚との二重性において彼の身体観を理解すべきであることを論じる。武井はタブロー・ヴィヴァンとアチチュードという、生身の人間が絵画や彫刻を擬する小演劇に向けられたゲーテの強い関心が、ゲーテの身体観、とりわけ身体の時間性とその表象における時間の停止という根本的な問題につながることを論じ、さらにこの二つの小演劇ジャンルに古典主義の身体観が集約的に現れていることを主張する。三枝は 18 世紀後半から 19 世紀にかけて人々の関心を集めた身体のメカニカル化とでもいうべき自動人形を取り上げ、古典主義的身体観の流行の裏に機械化された身体という発想が潜在していたことを論じる。照井は 19 世紀前半にロマン主義の影響を受けて発展したロマンティックバレエを取り上げ、そこに現れる幻想としての身体が上記 3 名の提示した 18 世紀末までの彫塑的、機械的身体の段階を超えて、自然の生成力を得て個人の内面の自律的展開を

託された新たな身体表象であったことを論じる。

従来のドイツ文学研究においては叙述された限りでの身体表象が扱われ、叙述の対象としての身体そのものはテクストの外部に別の論理で存在するかのようであったが、本シンポジウムでは叙述の平面にとどまらず、テクストと身体の接点としての彫塑、演劇、人形や舞踊といった対象を取り上げ、また身体を把握する主体と把握された表象としての身体との関係を分析することを特徴とする。

1. ヘルダーの彫塑論における身体表象の諸問題

濱田　真

J.G.ヘルダーは、身体の問題を、哲学・美学・言語論・歴史学等々の多様な学問領域に関わる広い思想的射程を持つものとして捉えている。本発表では、造形芸術、特に彫刻における身体表象の問題に焦点を絞り、ヘルダーにおいてその問題がどのような観点から論じられているかを考察することで、本シンポジウムのテーマである身体表現と時間性についての議論の導入としたい。

彫刻における身体表象の問題を扱ったヘルダーの作品としては『彫塑』(1778)が挙げられるが、この作品は、ヴィンケルマンおよびレッシングの造形芸術論への批判、ホガースの蛇状曲線論の受容、触覚の立場からの視覚の再検討等のさまざまな文脈で解釈されてきた。ここではこの作品を、『批評の森』(1769)や『ヴィンケルマン記念碑』(1777)等、ヘルダーの初期・中期の著作と関連づけて、鑑賞者と作品の相互関係において成立する身体表象という観点から読み解いていく。特に以下の点に注目して考察を進める。1)彫刻作品の身体表象がそれ自体で完結するのではなく、鑑賞者自身の身体の次元と密接に関わるものとして捉えられていること。2)鑑賞者の生きた身体が備える諸感覚の働きから、彫刻作品の身体表象の生成が理解されていること。3)彫刻作品に内在する時間と、鑑賞者が身を置いている時間との交差に注意が向けられていること。

2. ゲーテとタブロー・ヴィヴァンならびにアチチュード

武井隆道

本発表ではゲーテの『親和力』にも登場するタブロー・ヴィヴァンとアチチュードという二つの小演劇ジャンルを取り上げ、次の点を論じる。まずゲーテのこれらのジャンルに対する関心は、時間性の内に存在する生身の身体と、彫刻や絵画の表象として静止した時間の中に固定化された身体との関係を巡る考察の一環であること、またゲーテの身体への視覚は、ヴィンケルマン以来の古典主義的身体把握からロマン主義的身体表象へと向かうベクトルを持っていることである。

タブロー・ヴィヴァンは著名な絵画作品を生身の人間を使って再現する芸術であり、アチチュードは彫刻作品や歴史上の人物を一人の人間がポーズをとって模倣的に表すサロン演劇である。本発表ではアチチュードの主要な演者でありゲーテと関係が深い Emma Hamilton と Henriette Hendel-Schütz を中心にアチチュードとゲーテの関わりを概観する。またヴァイマル宮廷で演じられたタブロー・ヴィヴァンを記録をもとに概観する。その上で『親和力』(1809)、『イタリア紀行』(1816)、『ラオコーン論』(1798) 等のゲーテの著作を軸に、上記の論点を展開する。

Holmström (1967) と Jooss (1999) はこの小演劇の社会的並びに思想的なコンテクストからの分析を行っているが、本発表では特に Jooss がいう Täuschung＝Enttäuschung の効果をゲーテの身体論・彫塑論に関連させ、『親和力』におけるモチーフの分析につなげる。

3. 自動人形の時間性

三枝桂子

本発表は、18 世紀ヨーロッパで製作された自動人形の身体表象の問題について分析を行うものである。特にヴォルフガング・フォン・ケンペレン (Wolfgang von Kempelen, 1734-1804) が製作した自動チェス棋士人形、通称「トルコ人」(1770 年) を巡る議論から、自動人形に対する不気味さのイメージが喚起される裏に、生理的な時間の流れを持つ鑑賞者の生身の身体と、切り取られた時間に留まる

自動人形の人工的な身体との間に生じたズレが関係していたことを示すことを目的としている。

自動人形の背景には、心身二元論に基づく、身体をひとつの機械として解釈する身体機械論が存在していた。そして自動人形の発達の流れは、ルネ・デカルトからド・ラ・メトリに繋がる機械論的身体解釈の展開の流れと照応関係にある。このように自動人形は身体機械論を具現化し、その正当性を立証するかに見えたが、見せかけの知性を表現した自動人形の登場によって、自動人形に対する不気味さが喚起され、機械として身体を理解することへの限界を示すことになった。

この発表は、Westermann（2012）等を参照しつつ、18 世紀の自動人形の分析を通じて、「時間の流れを断ち切った静止の瞬間における時間の断面の形態としての身体」という古典的主義的な身体表象から、「時間の流れの中に生起する身体」というロマン主義的な身体表象への転換点を示すひとつの事例を考察するものとなる。

4. バレエの芸術性　―舞踊における身体と幻想の連関

照井夕可里

本研究は、舞台芸術における空間と時間と踊る身体の存在に着目し、ロマンティックバレエについて身体の視点からの検討を試みる。この舞踊が持つ物語性は、宮廷バレエのマイムやクラシックバレエのコード化された技巧と異なり、現実世界の時間性が死後の世界の舞台に転換され、死者は個別の身体を持つ。

ロマンティックバレエの作品は、主に日常と非日常の空間という異次元の対峙で構成され、主人公が死者に遭遇し現実と幻想の中で彷徨いながら、最後は破滅するという筋書きが多い。死者は自然界に永遠を待つ人間の精神の具体的な姿として身体化され、人間は死者との境界を超越して自己の存在を発見する。舞台上に出没する白い世界は、現世と来世の混合状態を示唆する。天上から地上の世界へと流れる時間の逆走の中で、精霊となった死者は身体化され、人間を超えるものへの志向を現実化する方法として用いられる。

舞踊家は、重力に逆らう動作で身体の領域を提示し、異界や精霊の幻想性と人間の身体性を融合させる役割を果たす。舞台芸術の空間性の出現は、舞踊家をロ

マン主義において崇拝される存在にしたのである。舞踊による現世と来世の往来は、この時代特有の舞台芸術の位相を顕在化する。

本発表では、Zachrias（1965）、Beaumont（1992）を参照しつつ、舞台舞踊での自然性が求められた時代の人間の身体と幻想との連関を追究し、身体表象の視座からロマン主義の影響とバレエの芸術性について明らかにしたい。

口頭発表：文学 2（10:40～12:35）　　C 会場（1501 教室）

1. ペーター・ハントケの語りについて
―Zustand の概念史のために

前田佳一

オーストリア、ケルンテン州出身のペーター・ハントケ（1942-）が 1972 年に執筆、発表した小説『満ち足りた不幸』（Wunschloses Unglück）はその直前に起こった母マリアの自死をうけ、彼女の人生の「不幸」の内実を社会批判的な視点から描いたものである。これは彼の代表作として今なお評価されているが、その評価の多くは作品において描かれた＜内容＞に基づくものであり、作中随所に挿入される＜語り＞をめぐるある種の理論的反省が物語研究にとって有するはずの可能性に関してはいまだ汲み尽くされてはいない。その語りにおいて中心的な役割を担っているにもかかわらず先行研究において充分に考察されてきたとは言えない「状態（Zustand）」なるものについて、啓蒙期以来のドイツ語文学諸作家（シラー、クライスト、ノヴァーリス、ムージル等）におけるこの概念あるいはモチーフへの言及あるいは考察の系譜を比較検討することにより、当該作品及びハントケの後年の作品の「語り」の問題について新たな知見が得られ、又、今後より一般的に「状態」の概念史が記述されていく上でも有意義な成果が得られるものと確信する。またそれによって、世界文学一般における物語の発生をめぐる問いに対しても一つの重要な事例を提示することができると信ずる。

2. ハンス＝ゲオルク・ガダマーの解釈学における「善意志 guter Wille」の概念
―ガダマー＝デリダ論争を手掛かりに

白鳥まや

一般にガダマー＝デリダ論争とは 1981 年にパリで行われたガダマーの講演に対するデリダのコメント及びそれに対するガダマーの再回答を指す。「テクストと解釈」と題されたガダマーの講演に対して、デリダはガダマーが理解の前提として言及した「善意志」を「コンセンサスへの欲望の絶対的な確信」であるとして批判する。本発表はガダマー＝デリダ論争の分析を通し、ガダマーの解釈学に

おける「善意志」の問題点とその限界を明らかにすることを目的とする。デリダからの批判が重要である理由の一つは、ガダマーの目指すところは常に「我々の意志や行為を越えた」理解という現象を記述することだからである。デリダが批判するように「善意志」が主観主義的要素であるならば、この概念はガダマーの解釈学における矛盾点ということになる。先行研究では、ヨーロッパ的伝統を重視する保守主義者であるガダマーに対しデリダが「脱構築」の観点からコメントを寄せたため、両者の議論は噛み合わずに終わったと見なされることが多い。しかしながら、なぜテクストの理解を第一義と見なすガダマーの解釈学が近年他者理解や異文化理解へ応用されるのかという問題を考える際、デリダからの批判は非常に重要な意味を持っていると考えられる。本発表ではこの論争以降にガダマーが発表した『破壊と脱構築』(1985 年) やデリダによるガダマー追悼文も参照しつつ、両者の議論を分析したい。

3. Das Ringen um Worte. Die Kommunikation als Problem in den Diskussionen in den Jahrbüchern der Deutschen Schillergesellschaft (1989-99)

André Reichart

In den Jahrbüchern der Schillergesellschaft stellt Walter Müller-Seidel 1989 zur Diskussion, ob Germanisten untereinander sich nicht mehr verstehen könnten, weil sie unverständlich schreiben würden. In der Folge kommt es zu einer wichtigen kritischen Debatte innerhalb der Methodendiskussion der Germanistik. Der sogenannte Streit in den Schillerjahrbüchern erstreckte sich über ein ganzes Jahrzehnt, beginnend mit der Ausgabe Nr. 34 1989. Während des Verlaufs sind wesentliche Punkte angesprochen worden die auch heute noch Probleme der Literaturwissenschaft darstellen, allen voran die Objektkonstitution des Faches selbst.

Die Frage, wie man schreiben solle, war direkt mit konträren erkenntnistheoretischen Vorstellungen verknüpft. Der Grund lag damals in den unterschiedlichen methodischen Ausrichtungen der Literaturwissenschaft.

Der Vortrag möchte die verschiedenen Schwierigkeiten im Hinblick auf die Fachsprache darstellen und zusammenfassen, um einen Überblick über einen theoretischen Grundkonflikt in der Literaturwissenschaft zu geben.

Weiter soll gezeigt werden, dass die momentane Ausdifferenzierung des Faches dieses Problem zwar vermeidet, es aber auf längere Sicht akut werden wird, da ein allgemeiner Objektbegriff weiterhin fehlt. Hierzu werden aktuelle Positionen und derzeitige Diskussionen berücksichtigt.

口頭発表：語学 2（10:40～11:55）　　D 会場（1502 教室）

1. fürchten と sich fürchten はどう違うのか
―ドイツ語他動詞構文と再帰構文の違い

伊藤克将

ドイツ語で「私は火が怖い」と言うとき、Ich fürchte das Feuer.という他動詞構文での表現と、Ich fürchte mich vor dem Feuer.という再帰構文での表現がある。

ドイツ語において、いわゆる反使役（Ich öffne die Tür. vs Die Tür öffnet sich.）や中間態（Ich lese das Buch. vs Das Buch liest sich leicht.）といった現象はこれまでも数多くとりあげられてきた。この表現の特徴は、主格のもつ意味役割が、他動詞構文と再帰構文で異なっていることである。一方、先に挙げた fürchten のような動詞では、他動詞構文でも再帰構文でも主格のもつ意味役割は同一であり、その二つの構文の機能がどう違うのかを問う研究は今まであまりなかったように思える。

こういった二つの構文が作成可能である動詞には、ほかに besprechen, scheuen, treffen, üben, verabschieden などがあるが、本発表では、このような動詞において、他動詞構文における目的語と再帰構文における目的語がどのように異なっているのか、コーパス調査の結果から考察を試みる。そして、他動詞構文での 4 格目的語が再帰構文で前置詞句目的語になるこの現象において、文成分の格下げという点、また、格下げされた文成分に見られる特徴という点に関して、受動文や be-動詞構文との共通性を見いだしていくことを提案する。

2. ドイツ語研究の構想的視点
―個別言語研究の実用的応用を求めて

在間　進

「言語機能（language faculty）」を生得的な「心的器官」として捉える研究でもなく、また、多言語の、大量の言語データから「普遍性」を求める研究でもなく、この数十年の間の新たな知見（分析理論）および新たな技術（コーパス分析）を取り入れた、新たな研究構想（仮説の実証も含む）の元での、個別言語ドイツ語

の「言語使用を中心に置いた実用的研究」が喫緊の課題になっている。

このように考える理由は、前 2 者によって「言語の本質」を解明することができたとしても、ドイツ語（個別言語）の「使用実態」の「網羅的・実用的」な分析・記述が実現されるわけでないことが明らかになったからである。「目標」が異なれば、「成果」も、また「方法論」も異なってくる。

本発表では、このような認識の下で、現在、試行的に行っているドイツ語動詞の実証分析の具体例をいくつか示す（語句結合分析の方法例、言語規則抽出の実証例など）。

何を研究目標とするかは、それぞれの研究者の自由である。しかし、それぞれの研究目標は、（その都度の段階で）明確に意識化されていなければならない。私は、「言語使用を中心に置いた実用的研究」を目標とするが、それは、ドイツ語研究に携わるものにとって日本のドイツ語学習者にとって必要なとされる情報を「的確に」手元に届けことが重要かつ不可避な課題であると考えるからである。

なお、「なぜ？」という問いには、「どうなっているか？」という問いが先行するのであり、ドイツ語研究では、両者の峻別が必要であることにも言及する。

口頭発表：文化・社会（10:00～12:35）　　E 会場（1505 教室）

1. フィクションのなかのリアリティ
―Charlotte Link の小説における女性像

横山　香

Charlotte Link は 1963 年フランクフルト・アム・マインで生まれ、10 代から小説を書き始めたドイツの女性ベストセラー作家である。本発表では、彼女が本格的にサイコサスペンスを書き始めた後の *Das Haus der Schwestern*（1999）、*Der fremde Gast*（2005）、*Das andere Kind*（2009）の 3 つの長編小説を取り上げる。Link 作品の特徴の一つは、登場人物の微細な心理描写にあると考えられるが、登場人物の多くが女性であるため、圧倒的に女性たちの物語となっている。彼女たちは殺人事件などの非日常的・非現実的な出来事に直面し、理解／支配できない他者と関わり合うなかで、自らの、ときには否定的でアンビヴァレントな感情に向き合いながら、目の前の困難を乗り越えようとする。

ソープ・オペラやロマンス小説といった「女性のジャンル」は、1980 年代以降、とくにジェンダーに関する文化研究の対象として取り上げられるようになった。これらは資本主義的家父長制イデオロギーを再生産する装置であると批判される一方で、オーディエンスの登場人物への同一化による感情的な関わり合いが生み出す想像力や快楽を、女性の主体構築やアイデンティティ形成の契機として肯定的に捉える研究も出てきた。文化研究者の Ien Ang はソープ・オペラの研究において、このような読者の感情的な関わり合いを「感情のリアリズム」という概念を用いて説明した。本発表ではこの概念を軸に、他の「女性のジャンル」に関する議論も踏まえつつ、Link 作品における女性像について考察する。

2. A.W.イフラントが目指した舞台づくり
―衣装や装置の問題を中心に

新沼智之

ドイツ演劇史においてアウグスト・ヴィルヘルム・イフラント（1759－1814）

について語られる場合、ゲーテ時代のとるに足らない戯曲を書いた劇作家としてばかり語られる。しかし彼は、上演を取り仕切る立場にある当時最も名高い俳優の一人でもあった。とりわけベルリン国民劇場時代（1796－1814）には、それまであまり重要視されてこなかった衣装や舞台装置を上演の重要な要素として重視し、その発展の礎を築いた。以降 19 世紀の演劇界において、舞台はスペクタクル化していき、衣装や舞台装置の重要度はさらに増していく。ロマン派のルートヴィヒ・ティークは、そうしたいわば衣装や舞台装置が主役になるような 19 世紀の演劇の流れの中に彼を位置づけている。しかし詳しく調べてみると、イフラントの試みは、衣装や舞台装置が主役になるような演劇を生み出すためのものでは決してない。それは、劇作家の劇世界を舞台に立ちあがらせるための「新たな手段」なのである。

そのことを論証するために、彼が衣装や舞台装置を自らの演劇理念との関係においてどのように位置づけていて、それらをどのように扱かったかを明らかにしたい。また、戯曲中心の演劇研究ではこれまであまり注意が向けられてこなかったこの時代（18 世紀後半から 19 世紀初頭）の演劇状況を近代演劇成立の萌芽期として捉え、近代演劇が確立する 19 世紀後半との連絡をつけ、演劇の近代化という問題をより長いスパンでとらえる見方も提示したい。

3. ジャンル確立期の「タンツテアター」をめぐる言説の分析
―ラバン、シュレンマー、ヨースにおける新しい舞台芸術の試み

柴田隆子

今日、舞踊ジャンルのひとつとなっている「タンツテアター」は、旧来のバレエ」を指す「テアタータンツ」に対し、舞踊で劇場作品を制作することをめざして、ルドルフ・フォン・ラバンとその弟子にあたるクルト・ヨースによって提唱された概念である。1920 年代には、「演劇」の脱文学化と「舞踊」の芸術ジャンル確立への動きの中で、既に演劇と舞踊を融合ないし越境する様々な試みが、理論と実践の両面でなされていた。ラバンやバウハウスのオスカー・シュレンマーは、五感を越える「ダンス感覚」に注目して身体と空間における動きが新たな「意味」を生み出すことを理論化しようとし、ラバンは祝祭劇としての群舞に、シュレンマーは観客の知覚受容も含めた創作にそれを求めた。

ヨースはラバンの「身振り言語（Gebärdensprache）」を踏襲し、ラバンの舞踊と対極にあると考えたバレエの様式性も考慮して、それらを凌駕する「ドラマの全位相に見合った表現」を可能にする、新たな動きの言語を模索した。ヨースの「タンツテアター」は、「ドラマ」の本質を描き得る新たな演劇、「タンツドラマ」であった。これらの試みは“Theater”が「劇場」であり「演劇」であることへの挑戦であり、舞台芸術における「言葉」を再定義しようとするものである。新たな舞踊の「言葉」の創出を考案すること、それは上演における「意味」とそれを支える認識の問題でもあった。

4. 背景としての旋法音楽
—アドルノ音楽論から透かし見られるある連続体

伊藤　壯

アドルノの音楽論においては、新音楽へと至る構築的な本格音楽の正統的系譜のみが賞揚される一方で、文化産業批判に伴うポピュラー音楽への仮借ない批判があまりに保守反動的で現代文化の本質を射損じているというのが一般に長年に渡り指摘・批判されてきていることである。だが無限旋律的にというよりは時に旋法的に紡がれる彼の文体からは、テキスト上では何ら連続性も持たない様々な<マイナー音楽>がある一貫性を持って読者の眼前に立ち現われてきたとしても強ち不思議ではない。ここでは、マーラー、ワーグナー、ベルク等のモノグラフ群での具体的な音楽分析を主な参照先とすることによって、遡って初期の音楽批評における一見最も直截な攻撃の対象の多くもが、つまり例えば古代から中世の音楽、また辺境的・内在的な東欧音楽やジプシーを含むオリエントの要素や影響、そして何よりジャズに代表される複製技術時代の大衆文化などが彼自身の理論により再審を認められるようになるのかどうかを確かめたい。すなわち近代西洋が築いたアカデミズム音楽の真髄を修めたアドルノが、その十全な理論の圧倒普遍的な同一性によって抑圧したもの、せいぜいがマテリアルあるいは背景としてのみ所在を認められる音楽があるのならば、一体どこに非同一的なるものの顕現がありうるのかという論議である。ただし何より、近代音楽以前の本源的な失われた伝統が最新のポピュラー音楽のうちに再興されるべきなどという極めて通俗的な結論が用意されないためにこそ、今改めて

自らの図像禁止令を貫き通した批判者アドルノのテキストそのものと共に歩むことが求められる。

ブース発表 3（11:30～13:00）　　G 会場（1404 教室）

教科書を使わない授業とは？
―麗澤大学ドイツ語・ドイツ文化専攻における新カリキュラム導入の試み

草本　晶
濱野英巳
Holger Schütterle
竹内拓史

昨今のドイツ語教育では、言語知識やスキルの獲得から、コミュニケーション能力や異文化適応能力の獲得へとその目的はシフトしているように思われる。本発表では、その目的を達成するための１つの可能性としてのタスク／プロジェクト型授業について報告を行う。

学習者中心のタスク／プロジェクト型授業の必要性が指摘されるようになって久しいが、ドイツ語授業における実践という面ではまだ未知数の部分が大きく、教科書学習を補うためのものや、文法学習を終えた中上級者を対象としたものが多いようである。ここで提示したいのは、初学者も含め、学習者が自ら問題を発見し、周囲と協働して課題の解決にあたるという学びのかたちである。

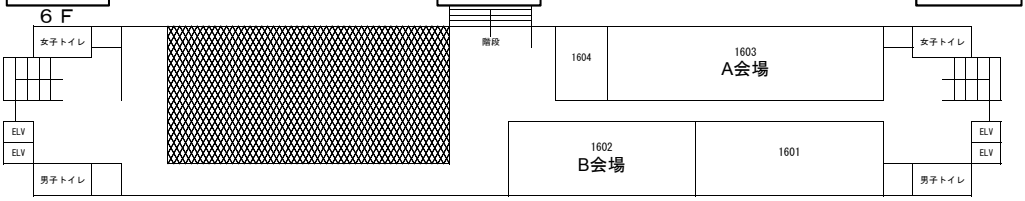
具体的には、麗澤大学で数年前より導入しているタスク／プロジェクト型授業中心のカリキュラムについて、その経緯に触れ、学習者の積極的な学びを促すために考えられる課題や、このような授業形態が学習者に与える影響について実例を用いて説明する。

なお、本発表においては教科書を「文法シラバス」「場面・状況シラバス」といった既存のカリキュラムの象徴として捉えている。これは必ずしも教科書そのものを否定するということではなく、従来「当たり前」と考えられてきた既存のシラバス、カリキュラムを捉え直すということを意味している。授業実践報告に留まらず、これらの点についても来場者と情報を共有できればと考えている。

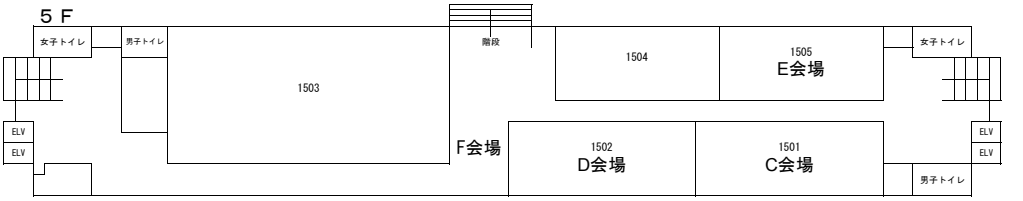
かえで　平面図

西側階段　中央階段　東側階段

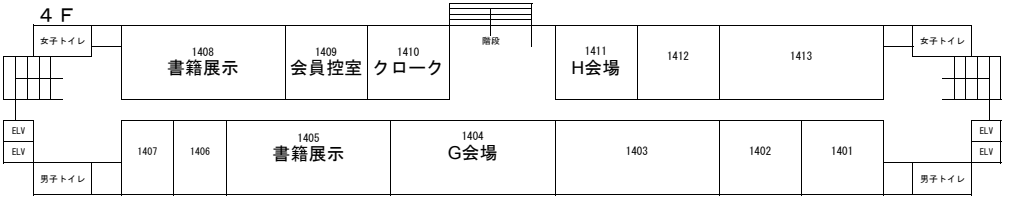
６Ｆ



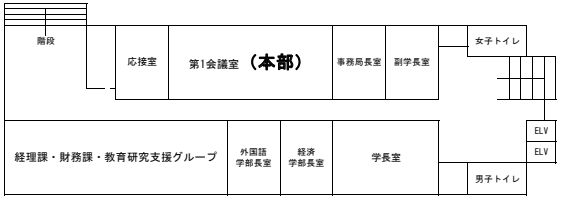
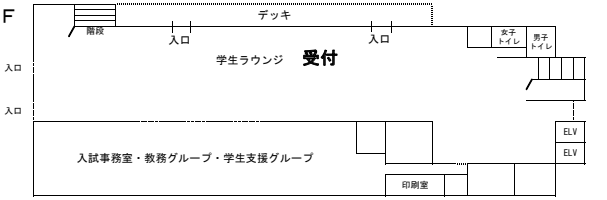
５Ｆ



４Ｆ



２Ｆ



１Ｆ